

出島からバタビヤへの日本知の伝播

— 蘭和辞書をめぐるメドハーストとフィッセルとの交流 —

陳 力 衛

1. はじめに

イギリス人宣教師 W. H. メドハーストが、1827年3月にバタビヤで離任したオランダ商館長のデ・ステュルレル (Johan Willem de Sturler) に出会い、日本語関係書籍を借りて何か月にわたって書写し、日本語を学習しつつ世界初の対訳辞書『英和和英語彙』の編集に取り掛かったことについて、すでに陳 (2022a) (『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類—メドハーストの書簡に基づいて—) に述べた。

しかしながら、メドハーストは編集作業を途中まで進めていたところ、最大の難関にぶつかることとなる。日本語のカタカナを識別し、単語として理解し、書くことができて、その実際の発音、つまりそのローマ字表記をどのようにすべきかが分からなかったのである。欧米の日本語学習者にとって、このことは欠くことのできない一つであり、なんとしても収録語のすべてに日本語のよみ(ローマ字表記)をつけなければならない必要に迫られていた。だが、「日本にかつて滞在したこともなく、日本人と語る機会にも恵まれなかった」(『英和和英語彙』序)メドハーストにとって、それを克服する手立てがなく、先行研究も手元に少ないため、辞書編集が行き詰まっていた。そのような時に、まさに天に助けられたように、2年後の1829年3月に長崎から帰国の途についたオランダ商館員の J. F. von O. フィッセルがバタビヤにやってきた。ちょうどメドハーストがマラッカからバタビヤに来て7年目のことであった。この出会いこそ上記の辞書

の問題を最終的に解決させるためのきっかけとなった。なぜなら、フィッセルが日本から持ち出した一冊の蘭和辞書は、その「和」の部分にあたる日本語には片仮名・平仮名だけでなく、仮名に対応するローマ字表記も記されていたからである。メドハーストにとって、それまで見たことのない辞書であったのである。

この蘭和辞書(仮に「フィッセル本」という)について、陳(2022c) (『ドゥーフ・ハルマ』のもう一つの流れ—フィッセルのローマ字本の位置づけ—)では日本語史における意義を中心に論じた。「フィッセル本」はフィッセルが前商館長ヘンドリック・ドゥーフによって編集されたオランダ語とローマ字表記の日本語からなる対訳辞書(いわゆる『ドゥーフ・ハルマ』の初稿)に基づいて、そこから重要な語句を抜き出し、さらに片仮名と平仮名を付け加えた新たな写本であった。この「フィッセル本」の4段構成(「オランダ語+日本語ローマ字表記+片仮名表記+平仮名表記」)が、メドハーストの『英和英語彙』の4段構成(「英語+日本語ローマ字表記+片仮名表記+漢字表記」)に直接的なヒントを与えただけでなく、日本語ローマ字表記においてもほぼ全面的に影響を与えた可能性があると思われる。

本稿では、陳(2022a)で扱った1827年7月のメドハーストの書簡に続いて、1829年7月にメドハーストがロンドン伝道会(London missionary society)に送った書簡(Medhurst to the Directors. Batavia, July 22, 1829.)に基づいて、まず、メドハーストとフィッセルとの出会い、そして「フィッセル本」の書き写しの交渉プロセスなどを整理してみることにする。あわせて、彼の提唱した書籍の交換と当時既刊された日本語関係書籍を基に、彼の日本語認識および日本向けの聖書翻訳法の提案を検討する。

2. メドハーストとフィッセルとの出会い

メドハーストの経歴及び彼の日本伝道への志については、すでに陳(2017, 2022a)で述べたので、ここでは贅言しない。まずはもう一人の登場

出島からバタビヤへの日本知の伝播

人物フィッセルについて確認することとしたい。

フィッセル (Johan Frederik van Overmeer Fisscher, 1800-1848) は、1800年2月18日オランダのハーデルウェク (Harderwijk) で生まれた。1819年蘭領東インドに渡り、1820年6月17日にニューウェ・ゼールスト号でバタビヤを出帆し、出島オランダ商館の一等事務官として1820(文政三)年7月23日長崎に到着した。1822年商館長コック・ブロムホフの江戸参府に随行した。1825年には荷倉役となった。1828年台風のため稲佐に擱岸しシーボルト事件の発端を作ったコルネリス・ハウトマン (Cornelis Houtman) 号に乗って翌1829(文政十二)年2月24日に日本を去った。そして、3月28日にバタビヤに到着したという。1年ほど滞り、1830年4月20日バタビヤで結婚したが子はなかった。その年に祖国に帰り、1833年には著書『日本風俗備考』をアムステルダムで出版した。1836年、再びバタビヤに行き翌年帰国し、1839年には恩給受給者になった。フィッセルは晩年の1840年から1847年にかけてパリに住み、日本についての著書 *Le Japon et les Japonais* を準備していたが、1848年に革命が起こったため未完に終わった。なお、フィッセルとシーボルトが自ら日本から携行した和本の中から、パリに渡った本やその関係資料があり、フィッセルが日本で収集したコレクションの自筆目録や、漢籍、和本(節用集や絵入本など数点も含まれる)がパリ在住の東洋学者たちの手に渡り、19世紀の日蘭仏に於ける書物交流に寄与したと思われる。1848年10月23日ベルギーのアントワープで病死した。数多くの日本収集品はフランスやライデンの国立民族学博物館に、また図書類の主なるものはライデン大学図書館に保管されている¹⁾。

この略歴からわかるように、彼は1829年3月28日にバタビヤに到着し、

1) 庄司三郎・沼田次郎訳注(1978)によるところが多いが、『蘭学資料研究会研究報告』272とクリストフ・マルケ氏の講演「パリに渡ったフィッセルとシーボルト旧蔵の和本—十九世紀の日蘭仏における書物交流を考える—」(東洋文庫, 2016.12.10)をも参考とし、多少付け加えている。

翌1830年4月以降帰国したということで、丸1年間メドハーストと同地で居合わせたことになる。この二人の出会いによってメドハーストの辞書編纂が大いに促進されたことについて、蘇(2014: 99)『鑄以代刻—傳教士與中文印刷變局—』は以下のように記述している(試訳を示す)²⁾。

1828年、メドハーストはオランダ当局に日本への貿易船への便乗を申請したが却下された。1829年の初めに、長崎からきた元商館員であるフィッセルが800頁にも及ぶ和蘭辞書³⁾を持っていることを知った。いままで入手した他の辞書には見られないローマ字表記があることから、メドハーストはこの辞書を、500ルピーの大金を支払って1か月以内に一部書き写すことが許された。付加条件として、ほかの人にコピーさせないことと、3年以内に公開しないことが約束させられた。メドハーストと中国人助手が昼夜を問わず写し、700頁を写し終えたところで、この件を知ったオランダ側の高官がフィッセルを呼び出し、なぜ外国人に日本語を学ぶための辞書を提供したかと詰問した。フィッセルは事の重大さからすぐに契約を破棄し、メドハーストから辞書を取り上げることとなった。

蘇(2014)の注記によれば、上記の記述は基本的にロンドン大学のSOASに保存されているメドハーストの手書きの書簡(July 22, 1829.)に拠っていることが分かる。その書簡は長いものであり、全部で15頁にわたっている。最後の3頁は附録の形で彼自身の業績の一つとして中国語による布教

2) 蘇(2014: 99)による原文は次のとおりである。

1828年麥都思向荷蘭當局申請搭乘貿易船前往日本不成，1829年初他獲悉前駐長崎職員費雪(Johan F. van Overmeer Fisscher)有一種日荷字典，抄滿800頁，四開大本，附有其他字典所無的發音說明，麥都思以500爪哇盧布高價商得限期一月抄錄一部の權利，還得具結不再供他人抄錄，也不得在三年內公開出版。麥都思和一名華人日夜抄寫，抄至700頁時，知悉其事的荷蘭高官傳訊費雪，質問何以提供外國人學習日本語文工具，費雪立刻毀約向麥都思要回字典。

3) フィッセルの持っていたのは和蘭辞書ではなくて、正しくは蘭和辞書『ドーフ・ハルマ』のローマ字本である。

のビラとその英語訳を報告するものであるが、書簡の正味の内容は手前の12頁にある。陳(2022a)で触れたように、日本語関係書籍を入手した経緯を報告した2年前の1827年7月の書簡がほぼ内容を変えずにロンドン伝道会の『福音雑誌と宣教師記事』(*The Evangelical magazine and missionary chronicle*)に活字印刷体として掲載されたことを踏まえて、1829年7月の書簡についてもまず同雑誌で確認を行った。結果、翌年のFebruary, 1830.号に二段組で活字印刷した同じ日付の書簡が載っていたのである。しかし、仔細に内容を確認すると、73-76頁にわたる紙面は主としてこの書簡の前半の布教活動の報告だけにとどまっていた、メドハーストがバタビヤでフィッセルを通してそのローマ字本の蘭和辞書を書写していた部分を省いていたことが分かった⁴⁾。なぜそのようなことになったかについて、実は書簡の後半で説明されている。

そこで、陳(2022a)の謝辞で記したように、蘇精氏からいただいたタイピングされた書簡を基に、『福音雑誌と宣教師記事』に公開された同じ日付の書簡の前半の布教活動の報告を除いて、主に書簡の後半の6頁の第2段落から始まる内容について検討することとする。そして、書簡の抜粋を本稿の最後に附す。なお、引用の便宜のため、行番号を付した。

2.1 新しい蘭和辞書との出会い

書簡の6頁の第2段落の冒頭から、まず停滞していた辞書編集は新しい蘭和辞書との出会いによって「ここ2か月間、日本語の研究を再開した」ことを告げる(以下、試訳と引用を交えて記す)。いままで手に入れた日本の辞書では日本語の読みの情報が欠けていたため、日本語の単語の正確な発音を知ることが非常に困難であった。「まったく暗闇の中で道を手探りで進んできた訳」だから、この新しく出会った蘭和辞書によって「いわばヨ

4) 記事の原文については、<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.ah6lr5&view=1up&seq=85> を参照。

ヨーロッパの正書法で表記された日本語の各単語の音が分かってきた」「それこそまさに自分が欲しかったものであり、それを手に入れば日本への渡航の必要性にほとんど取って代わるほどのものである」と、この辞書のローマ字表記の部分を高く評価している。「ただし、それはオランダ商館の紳士フィッセル氏のもので、彼が出版のためにヨーロッパに送ろうとしていたので、それをどのように入手し利用するかが問題であった。」(1-14行)とある。

それだけでなく、その辞書は日本国外に持ち出した現存する唯一のものである(16-17行)から、この天下の孤本をいかに入手するかは難しいことで、メドハーストは海に沈む危険性などいろいろな理由を挙げて、ようやくフィッセルを説得して書写の権利を500ルピーで獲得した(29行)ものの、1冊本の800頁のもの(43-47行)を1か月以内に書写することは大変な作業であった。

ここで、二つの点において注意を引かれることになる。一つは「日本国外に持ち出した現存する唯一のもの」であること。これはむろんフィッセル自身の言葉によるものだと思われる。つまり、ドゥーフ自身のローマ字写本は1817年ヨーロッパに持ち帰られた際、船の難波で海の中に消えたため、「フィッセル本」を天下の孤本と称したのであろう。

もう一つは「1冊本の800頁のもの」であること。陳(2022c)で紹介したように、現在ハーグにある王立図書館に所蔵される「フィッセル本」は〔図1〕のようにハードカバーに製本された3冊本(*Nederduitsch-Japansch woordenboek* (1834) 請求番号: KA 148)である。しかも頁数は700頁未満のものである。ここでいう「1冊本の800頁」とは一致しない。この相違点を説明するには、



〔図1〕「フィッセル本」

まず 1830 年のフィッセル帰国後の行動を辿ってみる必要がある。鈴木 (2014: 288) には以下のようにシーボルトのことを年表風にまとめているが、フィッセルのことにも触れている。

1830 年 4 月 シーボルトが帰国の途に就く。7 月にオランダに着く。

1831 年 フィッセルは、自身のコレクションの売立てのため、解説目録を作成する。

同年 2 月 ドゥーフ、カステイーユ、シーボルトらの推薦により、フィッセル・コレクションは国王に購入され、支払いは年賦で行われることになった。

1833 年 ドゥーフは、『日本回想録』を出版し、フィッセル、シーボルトが蘭和辞書『ドゥーフ・ハルマ』を不当に無視したことに激しく反論する。これを受けて、フィッセルは同年、『日本風俗備考』を出し、ドゥーフの功績を正当に評価し直す。

フィッセルは 1830 年に新婚後、シーボルトと同じ船で帰国した可能性がある。翌年からコレクションの目録作りに励み、国王に購入されることになる。その際この辞書がドゥーフの目にとまると、それは自分のものの盗用だと主張する。すると、フィッセルは同年の自著でそれを認め、ドゥーフの功績を正当に評価し直す。この経緯からも、また上記 3 冊に用いられた材質や刻字や飾りの模様の精巧さなどからも、長崎で製本が行われた可能性は低い。バタビヤ到着後の 1 年間か、オランダに帰国してからの所為であろう。1 冊目と後の 2 冊とでサイズが異なる⁵⁾のはおそらく長崎で入手された紙のサイズが最初から揃えられなかったことに起因しているであろう。改めてその「フィッセル本」の書誌を確認すると、1874 年の王立科学アカデミー図書館目録 (*Catalogus van de boekerij der Koninklijke*

5) 第 1 冊は 4 段分けのための縦罫線が一重、36 行から 38 行であるのに対して、第 2 冊と第 3 冊は縦罫線が二重となるがほぼ同じ行数である。

Akademie van wetenschappen) では次のように記されている。

CXLVIII. Doeff, F. *Nederduitsch-Japansch woordenboek*,

1811en volgende Jaren

HS. van 698 blz in 3 dln. 4°

De voorrede is geteekend door J F. van Overmeer Fisscher, Nagasakki A°.

1829. Maar uit dicns *Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk te Amst.* Bij J. Muller 1833, bi. 92 en 93 blijkt dat het slechts een door hem gemaakt en niet eens volledig afschrift is van het in Japan bewaarde werk van H. Doeff, Niet minder blijkt dit uit den tittle en voorrede van het volgende handschrift van Hend. Doeff:

CXLIX. -Bijvoegsel van het ontbrekende aan het “*Nederduitsch-Japansch woordenboek*” Amsterdam 1834.

HS. van 167 blz. fol.

CL. -Aan de derde klasse van het Kon. Nederl. Instituut, betreffende het woordenboek. Amsterdam, 14 Februarij 1835.

HS. van 42 bladz. fol.

ここではまずドゥーフの著作として1811年以降の成立、698頁、3巻とある。そして、フィッセルの序文にはNagasakki. 1829. とあることが確認⁶⁾できる。さらにフィッセル自身の著書『*日本風俗備考*』(*Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk*. Amsterdam: J. Muller, 1833.) では、これがドゥーフの辞書の不完全な抄録と認めている。また、その時点ではすでに「四つ折り判の3冊本」だったことが分かる⁷⁾。

6) 序文の日付「Nagasakki in Japan/1e 1829」については松田(1998)の推断によれば、「フィッセルは帰国後、完成した辞書に序文をつけた」と言う。

7) 庄司・沼田訳注(1978)『*日本風俗備考*』(139-140頁)にフィッセル自身が次のように言う。

私が1823年にこの書物が残っているのを発見してそれを書き写す機会を得たのは、まったく偶然によるものであった。そしてまた私は、私の写本は、四つ折り判の3冊本であったから、原本よりは不完全であるという相

つまり、本来1冊本のを製本する際に3分冊とした。その時、内容の一部が欠けてしまった可能性も否めない。事実、陳(2022c)で指摘したように、Vの部分は開始から終わりまでのページ数は33頁しかなく、最後の単語が *Vertoornen* (イラカスル) で、それ以降の項目が見当たらない未完のままになっている。つまりVの残りの部分を補完すれば、さらに倍くらいのページ数を要することになる⁸⁾。また、別の視点で見れば、どこかに紛れている可能性も考えられる。例えば、国文学研究資料館編(2014)『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』にあるフィッセルの作成した蘭和辞書(計43丁)⁹⁾にも目を通す必要が感じられるが、いずれも未調査で、現時点ではこのページ数の不一致の解決へは至っていない。

違はあるけれども、幸いにも1829年にそれを終了することができたのであった。

- 8) 『江戸ハルマ』とゆまに書房による復刻本『道訳法兒馬』(静嘉堂本)ではUとVがひとまとめになっているのに対して、静岡県立中央図書館蔵『ゾーフハルマ(長崎ハルマ)』(請求記号K070/3, 17冊, 26×19cm.)ではUとVが別々になっている。Vは第15巻(K070-003-015)全体, 353コマであるが、通し番号で言うと、3247から3428に至ったところに *Vertoornen* (イラカスル) という語がある。そして、3599で終わる。つまり、*Vertoornen* に至る前半までは182コマで、後半の終わりまでの残りは171コマである。この比率で考えれば、「フィッセル本」ではほぼ30頁分が省かれていたことになる(静岡県立中央図書館蔵『ゾーフハルマ(長崎ハルマ)』(<https://multi.tosyokan.pref.shizuoka.jp/digital-library/detail?tilcod=0000000028-SZK0003010>)参照)。
- 9) 該当箇所は次のとおりである。

506 *Verzameling van Japansche en Jesasche Woorden* SER. 95

フィッセル編。写。一冊。縦27.4糎、横20.0糎。蠟箋紗綾形に窠文散らし表紙。題簽欠。タイトル頁「*Verzameling van Japansche en Jesasche Woorden, beiden Klank mdt hollandtche letters, en de oveuzetting in die Faal, daar nerens uibgesfreren, hel Jesosche word in Japansrf Hirakane, en net Japansche woord met heifhinesche Faracter gesfreren, naan en Originele uitgane Van een Japander.*」。43丁。罫線は印刷。和蘭語の単語を挙げ、その発音を和蘭語とカタカナで示し、その各和蘭語に相当する日本語の和蘭語読みと漢字とを挙げる。フィッセル作成の蘭和辞書。スタンプ「*VERZAMELING VON SIEBOLD*」, 「*RIJKS ETHNOGRAPHISCH MUSEUM*」。文字スタンプ「*Uit de Verzam VAN OVERMEER FISSCHER.*」。フィッセル蔵書票「No. 64」。別に朱円印「*Fisscher Japan*」を押捺。

2.2 途中で辞書を取り上げられた理由

1か月以内という制約があり、しかも800頁の1冊本だから、メドハースト自身は昼夜問わず書写しても間に合わない。そこで中国人助手にも手伝ってもらって大半を書き写したところで、事態が一変した。フィッセルから契約の破棄の申し出があったのである。

書簡ではその原因として、まず「フィッセル氏はある高官から、外国人に日本語習得のための便宜を図ったこと、同時に、それは金銭が絡むことだと激しく非難された」(47-50行)とあり、そして「その証拠としてまさに2年前(1827.7.20)にメドハースト自身がロンドン伝道会に送った書簡の内容が『福音雑誌と宣教師記事』¹⁰⁾に掲載され、さらに他のいくつかの雑誌に転載されたことが挙げられている」のである。つまり、「その中には、私が8冊の辞書とその他の重要な著作物を入手したことが記されていた」(50-56行)とある。特に問題になっているのは「50ルピーもすると言われた単語集を、私が5ルピーで複写したという単純な事情」(56-57行)であったと言う。

たしかに、2年前の書簡を載せた当該雑誌にはこの書物に関する具体的な交渉金額を記している。

I may also mention a vocabulary of the Dialect of *Matsmai*, which differs in some respects from the Japanese: this work was said to be procured in Nangasacky for fifty rupees, and is now out of print, however, I have got it copied for about a tenth of that sum.¹¹⁾

メドハーストが『千字文』の入手に続いて言及した「松前方言」という本¹²⁾は長崎で50ルピーもする絶版のものなので、その10分の1くらいの

10) 陳(2022a)を参照。“Extracts of a Letter of the Rev. W. H. Medhurst, Missionary at Batavia, dated 20th July, 1827; -addressed to the Directors”. In: *The Evangelical Magazine and Missionary Chronicle* 6 [Missionary Chronicle for January, 1828] (29-31頁)。

11) 注10の雑誌の30頁に載る。

値段で書写させてもらったこととなる。

これをもって「英国のずる賢さに騙された」、「英国人に引きまわされた」(59-60行)と、叱責されたフィッセルは窮地に追いやられることとなった。しかも、

辞書を複写する権利としてフィッセルの要求した今回の500ルピーが知られれば、金銭が絡むことで、彼は非難を受けることになるし、同時に私と彼との他のすべての取引に、世間の目から見て疑いがかかることになる。そこで彼は、500ルピーに手を出さないことを決め、また、さらに非難されないように、彼の辞書の残りの頁を私に提供しないことが最も賢明な判断であったと思った。(63-69行)

と、メドハーストは、書簡では詳細に書写中の辞書を途中で取り上げられる理由を説明している。そしてフィッセルに責任があると考えず、また2年前のオランダ商館長だったデ・ステュルレルの寛大さ(本箱ごとを貸してもらって何ヶ月も書写したこと)にも謝意を表している。ただ、今後の活動報告の公開方法にも注意を払う必要があると、今回の件で教訓を得ていると記している(78-84行)。

こうして、結果的に「フィッセル本」の辞書を途中までしか写せないという「残念な結果になったが、それでも喜ぶべきことがつぎのいくつか挙げられる」とある。

一つは500ルピーが節約できたこと。

二つ目は入手したこの辞書は、日本語の正書法と発音について、全体を把握するのに十分な量を持っていること。

三つ目は、出版に関する制約がなくなること。(85-89行)

-
- 12) 恐らく『蝦夷語集』(稿本, 1824ころ成立)を指している。編者の上原熊次郎は松前奉行所の蝦夷通詞で、1811年から1813年にかけてのゴロブニン抑留事件の際には、ロシア語の通訳をも務めた人物であった。また、オランダのライデン大学図書館には、徳内とシーボルト共編の『蝦夷嶋言語 Yezogasima Kotoba』(写本)が所蔵されている。

それでもむしろ自分の語彙集の出版に障害がなくなり、その出版を提案し、すぐにでも「小さな英語と日本語の語彙を印刷するつもりである」と言う。その後、「生命と健康が維持しているならば、より完全な日本語の辞書を作り、同時にいくつかの聖書の日本語訳を行うつもりである」(90-93行)と意気込んでいた。

3. 今後の対策としての書籍交換

以上のように、メドハーストが新しい蘭和字典と出会いながら途中で取り上げられたプロセスを見てきた。その後、書簡では「シーボルト事件の影響」について頁を割いて説明している(99-127行)が、本稿では紙幅の関係で別稿に譲ることとして、本稿の内容と関係の深い書籍の交換と既刊書の取り寄せについて順を追って確認する。

3.1 モリソンの辞書の人気

メドハーストにとっては、自分の『英和和英語彙』の編集を続けるために、毎年オランダ商館員がバタビヤに持ち込んでくる日本に関する書籍の入手を希求していた。ただし、前述の状況から、それらの書籍を得るために金銭が介在してはいけなことが明らかとなってしまった。そこでメドハーストはR. モリソンの辞書が日本で人気を博していることを知り、それをもって日本の書籍と交換することを以下のように提案する。

本と本の交換は最も適切な方法である。長崎の日本人通詞たちはモリソンの中国語辞典を手に入れたいと強く願っている。しかし何年も前からそれを要求しているが手に入らない。日本語関係書籍と交換するために、この布教所に1, 2セット用意した方が良いと思う。実際に、その価値と同じだけの日本語関係書籍を買ってくれるなら、(代わりに)来年の真夏までに1, 2セットを調達してもらうことが有用である(132-136行)。

モリソンの辞書とは3部6巻の「華英英華字典」を指すが、広く利用されたのは Part II: Vol. 1. の華英の部の『五車韻府』(1819) と、Part III の英華字典(1822) であろう(日本での利用について、陳(2019)では一節を設けて記している)。また、『日本洋学編年史』(1965)の1830年の項に「英人モリソン訳漢文書下贈天文台訳局」とあるのは日本の最古の記録だとされている。従来、日本に入るルートを唐船によるものだと捉えていたようであるが、唐船持渡書のリストが整備されているにも関わらず、その書名が確認できていない。しかし、メドハーストの書簡の内容からバタビヤ経由のルートをもう一度考え直す必要が出てくる。

従来、モリソンと日本との繋がりを示す記録として、彼の死後、妻が編集した『モリソン回想録』(*Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison*, 1839)を挙げることが多い。同書の1828年11月のところにモリソンが自分の辞書2セットをオランダ商館員H. ビュルゲル(Heinrich Bürger)を通して長崎に将来したことに触れている。1セットは吉雄権之助のため、もう1セットはビュルゲル自身のためだとある¹³⁾。ところが、このビュルゲルについて、八耳(2005)は梶(1996)を参照しながら、『鼓銅図録』の原本を広州にもちこんだのは出島の外科医ビュルゲル(ビュルガーとも)だと記した上で、

ビュルガーはシーボルトの日本研究の助手として1825年に来日、1827年離任したが、バタビヤへ戻る途中、乗船するオランダ船ロッテルダム号が、難風に遭遇、船は広州に退避した。船の修復もあり、ビュルガーは広州でしばらくの間過ごした。1828年6月バタビヤに

13) 『モリソン回想録』に次のようにある。

Nov. 29. I have sent to Japanese an order for a copy of my Dictionary, to be given to the translator Gonoski Kokizas. Mr. Burgher suggests that I should write a kind letter to him, and he will forward it. I have give Burger also an order for a copy of the Dictionary, and thirty-two dollar's worth of Chinese books and prints. (Vol. 1, p. 413.)

戻ったが、シーボルトの後任を命じられ、慌ただしく8月にはコルネリス・ハウトマン号に乗り再び来日している。

とある。したがって、モリソンとの時間的接点を1年前の1827年11月とすべきということになる。筆者を含め、いままで『モリソン回想録』を過信していた訳である。ところが、具体的に時間軸で辿ると、ビュルゲルの乗るロッテルダム号が1827年12月28日の出帆し¹⁴⁾、その年の11月に広州でモリソンに会うのが時期的には不可能となる。この矛盾を解くために、改めて『モリソン回想録』を確認すると、ビュルゲル来訪を知らせる私信は宛名も記されず、1828年1月5日の TO THE EDITOR OF THE ASIATIC JOURNAL (アジア雑誌編集者への書簡) の後に置かれている。となると、唯一の可能性として、この私信が中国人宛であり、日付が中国の旧暦で記されてはじめて辻褄を合わせることができる。そうすると、出帆した1827年12月28日は旧暦の11月11日であり、モリソンと会ったのは同じ旧暦の11月18日、28日、29日であったはずだ。つまり、太陽暦の1828年1月4日、14日、15日であった。出島を出航して一週間で広州に入ったことが時間的に可能であろう。ビュルゲルはそこでほぼ半年の滞在を経て1828年6月にバタビヤに戻り、息つく暇もなく1828年7月7日にバタビヤを出帆した。しかも同じ船にフィッセルも乗り合わせていた。8月6日出島に上陸した¹⁵⁾。

バタビヤ経由のルートで日本にモリソンの辞書を持ち込んだのは1828年8月と想定できる。その後の当該辞書の利用を蘭通詞たちが広げ、フィ

14) 松方冬子・西澤美穂子・田中葉子・松井洋子編(2021・下)『十九世紀のオランダ商館・下—商館長メイランとシッテルスの日記—』527頁の付表1「1823-1834年来航のオランダ船一覧」による。

15) 梶輝行「シーボルト事件—商館長メイランの日記を中心に—」『新・シーボルト研究Ⅱ』(2003: 76)によれば、到着蘭船はコルネリス・ハウトマン号で、1828年7月7日にバタビヤを出帆した。フィッセルとともにビュルゲルも乗り合わせていた。8月6日出島に上陸した。シーボルト事件の関係でバタビヤへ出帆したのは翌1829年2月24日で、3月28日にバタビヤに到着したという。なお、前注掲載書138頁に詳しい。

ッセルも吉雄権之助と緊密に連絡しているところから¹⁶⁾、モリソン辞書の人気ぶりをメドハーストに知らせたのだろう。むろん、当のビュルゲルも、モリソンや S. W. ウィリアムズなどを通してバタビヤにいるメドハーストのことを認識していたはずであるため、言伝や、書簡を託されたビュルゲルから、中国での見聞や日本のことを直接聞かされた可能性も否めない。

そして 1831 年 12 月 1 日、出島にてビュルゲルがシーボルト宛に出した手紙によると¹⁷⁾、

Gonoske (権之助) は今年の春亡くなりました。私は彼の遺産である彼が訳した Morrison (モリソン) の「中国語辞書」を買いました。そしてそれを今良い日本語に書かせています。

私はあなたに次の章の最初の 2 部を送ることができますでしょう。

とあり、結局まわりにまわって、吉雄権之助の訳したモリソンの辞書がビュルゲルの手に落ちたのである。その行方も知りたいものである。

3.2 既刊の日本関係書の取り寄せ

メドハーストの書簡にはモリソンの辞書を含めて既出の日本関係欧文書籍と顕微鏡の取り寄せ要求を下記のようなリストにしている。

- (1) F. Didaco Collado, *Ars Grammaticae Japonicae linguae*, [...] 1632.
- (2) Rodriguez, *grammatical Japonica* ...
- (3) Montanus, *Gesantschappen aen de Kaisaren van Japan* ... 1669.
- (4) E. Kampfer, *de Beschrijving van Japan*, 1729.
- (5) C. P. Thunberg, *Observations in linguam Japonicam*, ... 1792.

16) 松方冬子・西澤美穂子・田中葉子・松井洋子編 (2021・上) に収録された「フィッセル留守日記 1826.2.15-1826.7.7」には、頻繁に吉雄権之助の来訪を記録している。

17) 野藤妙, 海老原温子, リザ・エライン・ハメケ, 宮崎克則「1931 年ビュルゲルがシーボルトに出した書簡」『九州大学総合研究博物館研究報告』第 11 号, 2013 年 3 月, 51 頁。

- (6) Titsing's work on Japan.
- (7) Gowlowim's 'Recollections' — not his 'Narrative'.
- (8) Morrison's Chinese Dictionary, 2 copies.
- (9) Gould's improved Pocket compound Telescope, with Companion.

(150-159行)

(1)はD. コリヤード (1589?-1641) の『日本文典』であろう。早くも1934年7月に坂口書店より大塚高信訳『コイヤード著日本語文典』(DIDACO COLLADO: *Ars Grammaticae Iaponicae Lingvae*, Rome, 1632.) が出されている。ほかにコリヤードの仕事として『羅西日辞典』(*Dictionarium sive thesauri lingvae iaponicae compendivm*) や『西日辞書』(*Japanese-Spanish Dictionary*) が知られている。

(2)はロドリゲスの『日本小文典』を指しているのだろう。書名の綴りから見て1620年にマカオで出版したポルトガル語の『日本語小文典』(*Arte Breue da Lingoa Iapoa*) ではなく、おそらく19世紀に出されたランドレス (Ernest Augustin Xavier Clerc de Landresse, 1800-1862) によってフランス語に抄訳された *Éléments de la grammaire japonaise*. Paris (1825) であろう。岩波書店より池上岑夫訳 (1933) 『ロドリゲス日本語小文典』上・下 (岩波文庫) が出ている。

(3)はアルノルドゥス・モンタヌス (Arnoldus Montanus, 1625-1683) の編集した『東印度会社遣日使節紀行』(1669) であろう。京都外国語大学図書館の所蔵紹介によれば、「本書は東印度会社から日本に派遣された使節や、イエズス会士の報告書などを纏めて刊行したもので、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての日本の姿が紹介されており、このオランダ語版の原本を基に、英語、フランス語、ドイツ語などに訳されて出版された。現在、本書は当時の日本の様子をよく表したのものとして評価されているが、この挿絵を見るかぎり日本人の髪形や衣服は中国的な雰囲気を持って描かれており、その背景を考えると興味はつきない。」とある。

(4)は E. ケンペル『日本誌』の蘭訳本であり、ケンペルおよび彼の日本研究についての紹介を国立国会図書館のウェブサイト (https://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_1.html) にて参照可能である。なお、Internet Archive (<https://archive.org/details/historyofjapangi01kaem/page/n499/mode/2up>) から原文も確認できる。陳 (2022b) (「19 世紀における『訓蒙図彙』の海外流布と利用」) では、ケンペルの『訓蒙図彙』の利用とメドハーストの利用とを比べてみた結果、メドハーストはケンペルのローマ字綴りなどを参照しなかったと結論づけた。それは、1829 年 7 月のこの書簡で初めてケンペルの『日本誌』をロンドン伝道会に要求していることから、往復の時間を考えれば、翌年 3 月の『英和英語彙』の出版にはすでに間に合わなかったことによる。

(5)は 1775 (安永 4) 年来日したスウェーデンの医師、植物学者の C. P. ツェンベリヤー (Carl Peter Thunberg) の『ツンベルク日本紀行』(国立国会図書館 https://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_1_2.html にて参照可能) を指している。1,500 語のスウェーデン語と日本語との対訳語彙集がその中に収めてある。

(6)は 1779 (安永 8) 年には商館長として来日した I. ティチング (Isaac Titsingh) の日本に関する一連の研究を指しているが、彼は 1779 年に商館長として来日、3 期にわたって通算 3 年 8 か月滞在した。1780 年と 1782 年の 2 回、江戸参府をしている。彼がまとめた多くの原稿は、彼の没後、知人や友人の努力で出版され、ヨーロッパの人たちが江戸時代中期までの日本を知る上で、貴重な資料になった。主なものとして、

- ①『歴代将軍譜』 *Mémoires et anecdotes sur la dynastie régnante des Djogouns, souverains du Japon* 1820 年
- ②『日本における婚礼と葬式』 *Cérémonies usitées au Japon, pour les mariages, les funérailles, et les principales fêtes de l'année* 1822 年
- ③『日本風俗図誌』 *Illustrations of Japan*. 英語版 1822 年
- ④『日本王代一覧』 *Nipon o daï itsi ran, ou, Annales des empereurs du Japon*. 1834 年

が挙げられる。なお、生前、彼によって編纂された蘭和对訳語彙表 *Eenige Japansche Woorden* (1781) が、学術誌 *Verhandelingen van het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten*, 3巻に収録されている。

(7) は G. V. ゴロヴニン (Golovnin, Vasilii Mikhailovich, 1776-1831) の *Recollections of Japan* (1819) を指しているのであろう。本書簡 (115-116行) と注12で触れたように、1811年から1813年にかけて抑留された経験に基づいて書かれたものを英訳したものである。詳細は下記の通りである。

RECOLLECTIONS OF JAPAN, COMPRISING A PARTICULAR ACCOUNT OF THE RELIGION, LANGUAGE, GOVERNMENT, LAWS AND MANNERS OF THE PEOPLE, WITH OBSERVATIONS ON THE GEOGRAPHY, CLIMATE, POPULATION & PRODUCTIONS OF THE COUNTRY. BY CAPTAIN GOLOWNIN, R. N. AUTHOR OF NARRATIVE OF A THREE-YEARS' CAPTIVITY IN JAPAN. TO WHICH ARE PREFIXED CHRONOLOGICAL DETAILS OF THE RISE, DECLINE, AND RENEWAL OF BRITISH COMMERCIAL INTERCOURSE WITH THAT COUNTRY. LONDON: PRINTED FOR HENRY COLBURN, PUBLIC LIBRARY, CONDUIT STREET, HANOVER SQUARE. 1819

日本語訳は早くも1825年に写本の形で『遭厄日本紀事』(元老尹 [著], 馬場貞由訳, 高橋景保校) の名で知られている。メドハーストがわざわざ“— not his ‘Narrative’”と記しているのは、おそらく次の本を指しているのだろう。

NARRATIVE OF MY CAPTIVITY IN JAPAN, DURING THE YEARS 1811, 1812 & 1813; WITH OBSERVATIONS ON THE COUNTRY AND THE PEOPLE. BY CAPTAIN GOLOWNIN, R. N. To which id added AN ACCOUNT OF VOYAGES TO THE COASTS OF JAPAN, AND OF Negotiations with the Japanese, FOR THE RELEASE OF THE AUTHOR AND HIS COMPANIONS, BY CAPTAIN RIKORD. VOL. II. LONDON: PRINTED FOR HENRY COLBURN, PUBLIC LIBRARY,

CONDUIT STREET, HANOVER SQUARE. 1818.

なお、日本語訳として徳力真太郎訳 (1984)『日本俘虜実記』講談社学術文庫がある。

(8)のモリソン辞書には前節で触れたので、ここでは省略するが、既刊書要求リストでは2セットをメドハーストが取り寄せようとしている。その行方についての調査は今後に俟つことにする。

(9)は書籍ではなく、グールド社製の改善型コンパニオン付き携帯式複合顕微鏡という実験用器機である。山脇 (1980: 103)によると、1747年と1754年にはすでに顕微鏡 *microscopium* それぞれ2台の舶載があり、いずれも9代將軍家重の注文で、うち1台はイギリス製であるという。メドハーストの注文から見て日本でのさらなる需要があったようだ。一方、八耳 (2005)でも上海にあるロンドン伝道会の図書目録の最後にこういった科学機器も収録されていると記しているが、当該の顕微鏡は並べられていなかった。

4. 日本語と中国語の関係についての認識

メドハーストは書簡の最後に日本語の性格について記している。

日本語は中国語を基礎としており、ほとんどの書籍には中国語をベースとして記述され、日本語の説明は、単語や文の新しい配置や転置など、文字通り一語一語挟まれたり、並べて書かれたりしている。
(214-217行)

さらにその判断が飛躍して、

このような文章を書く人は、日本語の文体や文法とはほとんど関係なく、中国語の作文がうまく、一語一語忠実に日本語に訳されている限り、容易に理解し、尊敬されることだろう。(220-224行)

というように、漢文さえうまく書ければ、それを一字一句丁寧に日本語に訳せば分かるとし、まさに漢文を基にした文章をイメージしているようだ。

これを踏まえて、日本で出版されている『四書』と同じ方法に基づいてイエスの四福音書も出版することを提案したいとしている(224-226行)。ここで言う『四書』とはメドハーストが実際に書写した『四書国字弁』を指すのであろう。2年前の書簡(1827.7.22)でも「私は日本語の翻訳を中国語の中に挿入した四書を入手した。なぜなら、この書物は、日本人の大多数にとって理解しやすいように、我々の聖書がどのような方法で書かれなければならないかを正確に示していて、現在の漢訳版に何らかの追加をする必要性を確信させてくれるからである」¹⁸⁾とある。たしかに、ホフマンの蔵書を研究している奥田(2013)によれば、

『四書国字弁』字成之編、10冊、皇都 弘簡堂須磨勘兵衛、寛政6 [1794] 序。

〈注〉「中庸」第一章から第十九章までの独語訳草稿添付。見返し付番：A2 [SER. 95]

とあるように、いまはホフマンの所蔵となっていると言う。それならば、陳(2022a)で触れたように、1827年ステュルレルの持ち帰った可能性が大きくなる。

中国の『四書』を日本語に訳した『四書国字弁』を見ると、漢文にあたる字句を大文字で順に掲げ、その後に割注の形で日本語による解釈と訳を付けているという翻訳法である。1829年の書簡では日本語の聖書翻訳もこの方法で行うべきと再度提案している。それは1817年ロンドン伝道会

18) 原文は次のとおりである。

I have transcribed the four books of Confucius, in Chinese, with a Japanese translation interlined with the Chinese. This work I consider to be invaluable, because it shows us the precise method, in which our Scriptures must be written in order to be intelligible to the great mass, of the Japanese and convinces us of the necessity of some addition being made to our present version, for if the books of Confucius which are read in their schools, and on which their faith is fixed, require a Japanese translation in order to be intelligible, how much more much the books of a foreign country require it — books of which they know nothing, or against which they have been unjustly prejudiced. (1827.7.22)

の宣教師モリソンと W. ミルンによる日本向け布教の決議内容がずっと脳裏にあったためであろう。その決議内容とは、「その国の言語を学習し、『聖書』がどのような変更を加えればその国で役に立てることができるか、またはまったく新しいバージョンが必要かどうかを、把握する必要があるかもしれない。」¹⁹⁾であり、この問題提起が常にメドハーストを突き動かしているのであろう。

メドハーストは 1835 年にシンガポール経由で広東に入り、モリソン亡き後の中国語聖書翻訳の改訂に加わる。同地にいるプロテスタント宣教師 K. F. A. ギュツラフや S. W. ウィリアムズらに対して日本語訳への自分の提案を行ったかどうかは確認できていないが、現に出版されたギュツラフ訳『約翰福音之伝』『約翰上中下書』(1837) と、S. W. ウィリアムズ訳『馬太福音伝』(1840?) は、彼の翻訳法をとらなかった。近藤 (2022) で示された日本聖書翻訳史における漢訳聖書の役割を思い起こせば、実際に漢訳聖書翻訳に参加したメドハーストの努力と役割を評価すべきだが、日本語聖書の初期の翻訳に彼の提案がどのように反映されたのかを検証する必要もあろう。

以上、見てきたように、メドハーストの意識の中では日本語における漢字・漢語をまだ中国語と同等視していて、片仮名・平仮名だけを日本語と捉えるイメージが強いようである。この書簡の時点から『英和英語彙』の出版まであと半年ということを考えれば、「フィッセル本」の 4 段構成の平仮名に代え、彼の辞書の最終的な 4 段構成では「漢字表記」をもって充てられたことは、中国語にも対訳していくことの試みであろう。当該辞書の和英の部における漢字表記を調べると、わずか語彙全体の 2 割弱を占めるに過ぎず、漢字と日本語との関係への理解がまだ曖昧で、どちらかという中国語として意識している可能性が高いと考えられる。後に彼の辞

19) 陳 (2022a) を参照。

書を日本で翻刻した村上英俊は『洋学捷徑伝英訓弁』(1855)ではメドハーストの漢字表記の欠けたところを全て埋めていく徹底ぶりとは対照的である。たとえば、下記の一覧(〔図2〕)のうち、「イシビヤダイ」「ニホイワタル」「ホバシラ」「ホドコス」「ヌマ」「ライユク」など、もともとメドハーストの辞書にはなかった漢字表記が記されている。

邦字	漢字	英之訓字	英傑列斯語
イシビヤダイ	地坐	isibiya dai	isibiya dai
ニホイワタル	成勢	nihoiwa taru	nihoiwa taru
ホバシラ	六親	hobashira	hobashira
ホドコス	六藝	hodokosu	hodokosu
ヌマ	豊賈	numa	numa
ライユク	玻璃	raiyuku	raiyuku
イシビヤダイ	香	isibiya dai	isibiya dai
ニホイワタル	日本	nihoiwa taru	nihoiwa taru
ホバシラ	播	hobashira	hobashira
ホドコス	地	hodokosu	hodokosu
ヌマ	平伏	numa	numa
ライユク	平地	raiyuku	raiyuku
イシビヤダイ	德	isibiya dai	isibiya dai
ニホイワタル	吐劑	nihoiwa taru	nihoiwa taru
ホバシラ	地球	hobashira	hobashira
ホドコス	珍物	hodokosu	hodokosu
ヌマ	龍王	numa	numa
ライユク	龍吐水	raiyuku	raiyuku
イシビヤダイ	呂宋	isibiya dai	isibiya dai
ニホイワタル	進行	nihoiwa taru	nihoiwa taru
ホバシラ	和睡	hobashira	hobashira
ホドコス	俗人	hodokosu	hodokosu
ヌマ	用意	numa	numa
ライユク	菜蔬	raiyuku	raiyuku
イシビヤダイ	伶俐	isibiya dai	isibiya dai

〔図2〕 村上英俊『洋学捷徑伝英訓弁』

5. おわりに

上記の書簡で見てきた通り、新しい蘭和辞典「フィッセル本」をめぐって、メドハーストとフィッセルはさまざまな交渉を持ちながら、途中までしか書き写せなかったにもかかわらず、最後まで友好的に事を進めている。八耳(2005: 30)が指摘するように、「メドハーストに日本の書籍を見せた『日本から戻った数人の紳士 several gentlemen』の一人に、このフィッセルも含まれていると考えられる」はずである。そしてフィッセルも前述の自身のコレクションの解説目録『日本収集品目録』の序文に「知識豊かな日本人の方」が「言語と文学」の部に記録された諸本の翻訳と解説を手助けしてくれたと記す。そしてフィッセルはバタビヤに戻ってから、この翻訳の正確さを「優れた中国語能力を有するメドハースト Medhurst 宣教師」

に確認してもらっていると記しているようにバタビヤにいるメドハーストの語学力がいかに評価されていたのかが分かる²⁰⁾。陳 (2022a: 167) でも触れたように、フィッセルの『日本収集品目録』にメドハーストが補筆した痕跡が残っている。これらのことをはじめ1年にわたる両者のバダビアでの交流は様々な形で残されている。

バダビアにいるメドハーストはまるで知の中継点のように、出島からの情報を取り入れて英米諸国へバトンタッチしていく。また、『英和和英語彙』の編集の最終段階、切羽詰まった状態で紆余曲折を経て不完全ながら途中まで書写できた「フィッセル本」は、ローマ字表記を備えた最良の蘭和辞書として、彼の『英和和英語彙』に寄与したことは間違いない。今後、『英和和英語彙』の仕上げ段階において、この「フィッセル本」をどのように、またはどの程度まで利用したのかを両辞書の比較を通して検証していかなければならない。特に英語式の読みに従ったローマ字綴りという従来の見解を根本から見直していくとともに、「フィッセル本」から追加採用された語彙の特徴などを検証することも課題の一つとして考えている。

メドハーストの「フィッセル本」利用は、長崎で編集された蘭和辞書『ドーフ・ハルマ』の海外流出のもう一つのルートを切り開いたのである。ひいては日本語を世界へ広げるための新しいステップとなったと言っても過言ではないと考える。

附録：Medhurst to the Directors. Batavia, July 22, 1829.

- 1 To the Japanese language I have again turned my attention, and for the last two months
have pursued the study of it with all possible ardor. I was impelled to recommence with
such eagerness, from the circumstance of having met with a new Japanese and Dutch
Dictionary, with the sound of each Japanese word given in the European orthography,
5 whereby the students could tell how to pronounce Japanese, just as it is done by the
natives. In all the former Dictionaries which fell in my way, this was wanting which

20) 鈴木 (2014: 540) を参照。

rendered it very difficult for me to know the true pronunciation of any single Japanese word, and having neither native or foreign acquainted with the language to converse with, I had frequently to grope my way in the dark, without being certain of the ground upon which I was going. But immediately I saw this new work, I found it was the very thing I
10 wanted, and that if obtained it would almost supersede the necessity of a voyage to Japan. But how to get the use of it was the difficulty — it belonged to a Mr. Overmeer Fisscher, one of the Gentlemen of the Dutch Factory, who was about to send it to Europe for publication. To ask him for the loan of it, was almost as good as asking him for his copyright, and to wish him to give up to a stranger, advantages acquired with difficulty, &
15 possessed without a rival. He argued justly, that the book in his possession was the only one in existence out of Japan, and that great praise if not profit would attach to the man who should first bring it into notice. Should he give me a copy of it, I might afford the same privilege to another, and thus his book be multiplied ten or a hundred fold, before he himself could have an opportunity of publishing it. I said that neither praise nor profit
20 came within the compass of my objects, and that I could give my bond if he wished it, not to allow a single individual to copy it, till he should have had ample time, to make what use of it he pleased. Besides I drew an argument from the very fact of its being the only one in existence, to induce him to let me copy it. What would you do, said I, if the book should be lost on the voyage to Europe? I would insure it for 1,500 rupees, said he, and
25 then if it was lost, I should get my money. Yes, but you would not get your book, — whereas if you allowed it to be copied you might secure yourself against all accidents. Upon this he asked ten days to consider of it; at the end of which he told me he would let me copy the books upon a few conditions: — 1st that I should pay him 500 rupees, being the half of the expense he had been at in getting it compiled, and 2ndly that I should enter
30 into a bond not to make any public use of it for three years, and even then if he should see fit to repay the sum I had laid down, I should never be permitted to publish it all. The first condition was the only one I could object to, as enormously extravagant — the other two were of less moment, as I should never wish to publish a Dutch Dictionary, even if I were capable of it. But what was to be done? I could not go personally to Japan — the
35 Government having refused my application for leave — I could meet with no foreigner able to converse in Japanese, and thus could have no opportunity of knowing the true powers of the Japanese letter, or the pronunciation of their words — the book in question would supply this defect, and though the expense of obtaining it was great, the necessity seemed to warrant the outlay. I therefore undertook the task; and as he did not allow me
40 so much as a month to copy it in, I was obliged to work early & late to get it completed.

Having only one book to copy from, it was impossible for more than two persons to work at it at once, and not being able to get a writer here, that could (or would) copy half so fast as myself, I sat down with a Chinese (who copied the Japanese part) to see what could be done. In about three weeks, we finished more than three parts of it, and should have
 45 completed it within the given time, amounting to about 800 closely written folios, but for a circumstance which prevented our further progress. Mr. Fisscher was taken to task one morning by a Gentleman high in office, for affording facilities to foreigners for acquiring the Japanese language, and it was at the same time roundly insinuated that he had done the same for certain considerations in money. In proof of this an extract was read from the
 50 Oriental Herald, or Asiatic Observer, which proved to be one of my letter to the Directors, copied out of the Evangelical Magazine. It was therein stated that eight Dictionaries had been procured by me, together with other works of importance, which must have been furnished by the members of the Dutch Factory, whose duty it was to afford those advantages first and solely to their own Government & nation, whose servants they were,
 55 and whose interests they were bound to study. The simple circumstance of the vocabulary which was said to have cost 50 rupees in Japan, being copied by me for five, was also alluded to, and it was hinted that if the persons afforded the use of those books, had not been the recipients of English bribes, they had nevertheless been the dupes of English cunning, and had suffered themselves to be miserably 'led by the nose.' Now it is true
 60 that Mr. Fisscher did furnish me with a great part of the books mentioned in that letter as copied by me, and particularly the unfortunate five rupee one, but it is not true that he ever received a single piece from me; by way of remuneration for his kindness. But his present demand of 500 rupees, for liberty to copy his Dictionary, would if known have brought him under the above reprehension, and have thrown at the same time a suspicion over all
 65 his other transactions with me, in the eye of the world: so that he felt himself imperatively called upon to abstain from touching the smallest price of our money, — and also, lest he should subject himself to further blame, he judged it most prudent to refrain from affording me the remaining few pages of his M. S. Dictionary. In this I cannot consider Mr. Fisscher in the least to blame, as he must consult the wish of the Government by
 70 whom he is employed — on the contrary I consider myself & the Society greatly under obligations to him, for what he has hitherto done, and more particularly to Colonel De Sturler, late chief of the Dutch Factory in Japan, for having given the whole box of his books over into our hands, to copy from, and do what we would with for months together. Thus the M. S. Dictionary is incomplete, and all further help in our object from that
 75 quarter can I fear no longer be expected. This should teach us to be more cautions how we

publish the minute particulars of our proceedings, especially in a case, where not only a bigoted Heathen, but a jealous Christian Government are to be dealt with. I attach most blame to myself for not having given you the needful caution before, particularly as I was on the spot, and ought to have known the difficulties attending publicity in such things —

80 but now I hope you will take the hint, and suppress the greatest part of this paragraph except what regards the prosecution of the study, thanks to Overmeer Fisscher and De Sturler for their kindness in allowing us to copy their books, gratis, and, if you please the proposal of publishing a vocabulary of the language, as mentioned below. Notwithstanding the disappointment respecting the M. S. Dictionary, there are still a few

85 things of which we may be glad: 1st the 500 rupees are saved, — 2ndly seven eights of the Dictionary are secured, comprising enough to afford a very full and exact idea of the Japanese orthography and pronunciation nearly as much as if we possessed the whole, and 3rdly, we come under no restrictions with regard to publishing. In consequence of which, I intend (God willing) to print a small English and Japanese vocabulary, by lithography

90 immediately: which will be followed, if life and health are spared, by a full and complete Dictionary of the Japanese language, going on at the same time with some Scripture Translations into that tongue — but I would rather postpone the latter a little longer, lest future Quarterly Reviewers should say, that I translated the S. S. as a Japanese exercise. In connection with the Japanese affair, it may be well to mention that the application

95 which I sent in to government last year, to be allowed to proceed to Japan in the ships of the Factory, has met with a decided refusal. They have no doubt been led to set themselves so positively against the measure, in consequence of what occurred in Japan during the last season. Dr. Siebold, who has been some years in Nagasacki, and who has made the most extensive collection of Japanese books and charts ever in the hands of a

100 European, was suddenly arrested, at the instigation of the Japanese Government, on the charge of having in his possession maps and statistical information of great importance, which he had obtained by means of a close correspondence with many Japanese, in various parts of the interior. Upon the first intelligence of the charges against him, he was obliged to bury the greatest part of his Japanese library, enclosed in then cases in the

105 garden adjoining his house, and to smuggle the rest on board the Dutch ships, in order to get them sent to Batavia — after which his papers (I believe) were examined, and he was ordered into close arrest in his own house, until the pleasure of the Japanese Government should be known. I understand he was offered his liberty, if he would discover the names of the Japanese who had supplied him with charts & statistical information, which would

110 have been immediately followed with the loss of their lives, but that Dr. S. preferred

remaining in perpetual imprisonment to the bringing of so dire a misfortune on others.
 What will be the result of these things none can tell — the probability is that he will be
 sent back to Batavia by the ships of the next season, but it is not unlikely that ere the
 arrival of the ships he may be removed to the interior, to something like Golownin's
 115 confinement, never to see a European face again. Such is the danger of having anything to
 do with Japanese literature in Japan — All the members of the Dutch Factory congratulate
 me on not having gone last year, as if they had discovered an interference with their
 religion as well as their statistics, and found out that a Missionary had trod their shores, the
 foment would no doubt have been much greater: the Government here are therefore
 120 determined to deny me permission to go this season. From all this may be seen the great
 difficulty of procuring Japanese books, — every Japanese found giving a native work to a
 European is punished with death — every Netherlander discovered affording facilities to
 foreigners to learn the Japanese language, is subject to the animadversions of his
 superiors. Dr. Siebold has already been found faults with for sending presents of literary
 125 curiosities to the subjects of foreign states, and the boxes of books which he has forwarded
 to Batavia, cannot be used or perused by any unconnected with Government.
 Nevertheless, Japanese books are brought by one and another, and every year sees an
 accession to their number. I have endeavored to make friends of the different Gentlemen
 going this season, and hope to get something by the return ships, but from circumstances
 130 above mentioned it must appear evident that money cannot appear in the transaction.
 Books for books are the most suitable mediums of exchange, and as the Japanese
 translators at Nagasaki are exceedingly anxious to obtain a complete copy or two of
 Morrison's Chinese Dictionary, and have requested it several seasons without being able
 to obtain it, I should think it would be advisable to have one or two ready at this station, in
 135 order to exchange with Japanese books. Indeed I have promised to procure a copy or
 two by next mid-summer, if they will procure Japanese books for me equal to their value.
 Philosophical apparatus also being in much esteem at Japan, I should think that C. Gould's
 Improved Packet Compound Microscope, with 'The Companion to the above' would be
 140 considered of some value there, and being of small compass could be easily transported
 backward and forwards without much trouble. Perhaps there may be some young persons
 found among the ranks of Zion's friends, who would willingly forego the pleasure and
 satisfaction they derive from such instruments for the sake of assisting us in procuring a
 few Japanese fragments.

But while I am anxious to procure as many books as I possibly can from Japan, I
 145 would not forget to avail myself of what has been already published in Europe on the

subject — and as you must see the necessity of such works to aid me in my present undertaking, I need scarcely press it on you to send me the following books, by the very first opportunity, viz.

F. Didaco Collado, *Ars Grammaticae Japonicae linguae*, [...] 1832.

150 Rodriguez, *grammatical Japonica* ...

Montanus, *Gesantschappen aen de Kaisaren van Japan* ... 1669.

E. Kampfer, *de Beschrijving van Japan*, 's Hage. 1729.

C. P. Thunberg, *Observations in linguam Japonicam*, ... 1792.

Also Titsing's work on Japan.

155 Gowlowim's 'Recollections' — not his 'Narrative.'

Morrison's *Chinese Dictionary*, 2 copies.

Gould's improved *Pocket compound Telescope*, with Companion.

But some may ask, and I frequently ask myself, where is the use of all this? And it was not till I was able to satisfy my own mind on the subject, that I could be brought to apply
160 myself with ardour to the study. It is true I cannot yet to Japan in the regular way, and neither do I think the whole power of the Dutch Government could ensure my safety there, (were they even inclined to exert it) if it should be once discovered that I was a Missionary. Again, the books I might compose, were I ever so well skilled in the language, could not by any possibility be taken to Japan in the Dutch ships, as I could
165 never obtain persons willing to run the risk of importing them, and if I could, it would endanger the whole ship & cargo, if not the entire trade to Japan, if discovered. A Christian book found in Japan, much immediately he delivered up to the proper authorities to be burnt, otherwise the holder, and all his relations are immediately & indiscriminately murdered: indeed, I do not know whether it is not death even to receive such a book,
170 though ignorant of its contents & meaning. Further, the date of the book at the head of the list I have just given, shews that works for the benefit if Missionaries seeking to acquire the Japanese language, for the sake of preaching the Gospel in that country, may lie by for 200 years, without being of the least use to a single individual, in the way in which they were intended — and our's of the same nature may lie by as long, without coming into
175 service. So that the prospect is in every way most gloomy — it is the forlorn hope of Missions. Now to prepare vocabularies & dictionaries to lie by 200 or more years and to translate the Bible or parts of it into Japanese, merely to have it said, that another translation is added to the 148 issued by the Bible Society, and carried forward by the servants of the Missionary Society, while the only use that can be made of it, is to lie on
180 the shelves of the curious, or to rot in the go downs of Batavia, are object not worthy the

time & expense that must be bestowed upon them. — But, it is because there is still a possibility of turning such labours to good account, that I m inclined, in spite of the above mentioned appalling & gigantic difficulties to persevere, as soon as a sufficient number of books are prepared, & a tolerable knowledge of the language is acquired, a voyage might
185 be undertaken up the China sea, such as the one contemplated & planned in my letter to the Directors six years ago. It could not of course be attempted in the regular ships — a small vessel must be procured on purpose — such a man as Peter Gordon would rejoice to take the command of her. Then freighted with Chinese books in abundance, and our Japanese cargo, we might coast along the shores of China, Formosa, the Lew-kew Islands,
190 Japan itself, the Kurites, & Sagalien. In all these places we might communicate with fishing vessels coming off from the shore, or touch occasionally at some peaceful villages, where the influence of their arbitrary governments is not felt. That this is not a mere imagination, may be known from the fact that square rigged vessels do annually go along the coast of China, to trade in contraband opium, and actually stop six or seven days in a
195 place without the officers of government, who live at some distance in the interior, ever knowing of their arrival. Formosa is completely open to us, and to come nearer to the place where our chief object lies the Lew-kew islanders all understand the Chinese characters, and where many Japanese residing among them.

Perhaps a short stay at some of those islands might not be unadvisable after which the
200 Japanese coast might be skirted, as Peter Gordon did it some years ago, where he met with numbers of fishing vessels who came off to him, far out of the reach of government officers, & where he actively gave away two Chinese New Testaments. Beyond Japan we have the Kurite islands & Sagalien, where many Japanese reside, in numbers sufficient to profit by our labours, but not in strength equal to do us any harm. I mention all this as
205 what might be done in order to shew that our present attempt at acquiring the language would not be entirely lost labour, — but I do not think such a voyage should be undertaken till some proficiency in the language is gained, and a suitable quantity of books prepared in it. Perhaps some may ask, whether it would not be better to see the country, & converse with the people in order to learn something of them first, before any
210 — was made to compose books for them — to whom I would answer, in every other instance I myself would esteem it necessary, but not in this — because it is very possible to compose books intelligible to the Japanese without being deeply versed in their style and grammar. For the Japanese language is founded upon the Chinese, and most of their books have a column of Chinese as the basis of the discourse, while the Japanese
215 explanation is interspersed or written alongside literally word for word, with such any new

arrangement or transposition of words & sentences. So that a Chinese student, who had but a verbal acquaintance with Japanese while he threw his compositions into a good Chinese style, & merely added the explanation of the words in Japanese, according to their own custom — might be sure of rendering himself intelligible to the learned among them, 220 and probably to the common people also a person so writing has little or nothing to do with Japanese style & grammar, but so long as his Chinese composition is good, and each word is faithfully translated into Japanese, it will be readily understood, & perhaps esteemed among them. This is precisely the way in which the Four Books of Confucius are published in Japan, and upon the same model would I propose to publish the four 225 Gospels of Jesus also.

The Directors in their last, very wisely recommend that some missionary brother should be associated with me in the study of Japanese, for human life is extremely uncertain, and it would be a pity to lose the growing[?] that has already been gained in this pursuit. William Young, the only person with me at present, though a zealous, pious & 230 prudent young man, is not yet decided, either by your determination or his own, what course he should pursue after his three years of probation are expire; and even if he was, he has not that strength and vigour of constitution which would be requisite for the study of a new & difficult language.

【参考文献】

- 石山禎一 (1970) 「“Dr. Heinrich Burger”の生涯について」『法政史学』22
- 奥田倫子 (2013) 「日本語学者ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン旧蔵日本書籍目録」
『書物・出版と社会変容』14
- 梶輝行 (1996) 「蘭船コルネリウス・ハウトマン号とシーボルト事件—オランダ商館長メイランの日記に基づく考察を中心に—」『シーボルト記念館鳴滝紀要』6
- 加藤知己・倉島節尚編著 (2000) 『幕末の日本語研究 W. H. メドハースト英和・和英語彙—複製と研究・索引—』三省堂
- 河元由美子 (2003) 「メドハーストの『英和和英語彙集』—その利用のされかた—」『英学史研究』36
- 古賀十二郎 (1968) 『長崎洋学史』長崎文献社
- 国文学研究資料館 (2014) 『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』勉成出版
- 近藤泰弘 (2022) 「明治元訳新約聖書の諸本の系統と文体」『國語と國文學』2022年8月号, 99-8

- 斎藤阿具 (1928) 『ゾーフ日本回想録』 駿南社
- 山東功 (2014) 『日本語の観察者たち—宣教師からお雇い外国人まで—』 岩波書店
- 庄司三郎・沼田次郎訳注 (1978) 『日本風俗備考』 東洋文庫 326, 平凡社
- 鈴木淳 (2014) 「シーボルト日本書籍コレクション考」『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』 勉成出版
- 蘇精 (2014) 『鑄以代刻—傳教士與中文印刷變局—』 台湾大学出版中心
- 陳力衛 (2015) 「メドハースト『英和和英語彙集』(1830)の底本について」『日本語史の研究と資料』 明治書院
- 陳力衛 (2017) 「辞書は伝道への架け橋である—メドハーストの辞書編纂をめぐる—」 郭南燕編著『キリシタンが拓いた日本語文学』 明石書店
- 陳力衛 (2019) 『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に—』 三省堂
- 陳力衛 (2022a) 「『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類—メドハーストの書簡に基づいて—」『成城大学経済研究』 235
- 陳力衛 (2022b) 「19世紀における『訓蒙図彙』の海外流布と利用」『成城大学経済研究』 236
- 陳力衛 (2022c) 「『ドゥーフ・ハルマ』のもう一つの流れ—フィッセルのローマ字本の位置づけ—」『國語と國文學』 2023年1月号, 100-1 (2022.12.12 発行)
- 松方冬子・西澤美穂子・田中葉子・松井洋子編 (2021) 『十九世紀のオランダ商館—商館長ステュルレルの日記とメイラン日欧貿易概史—』 日蘭交渉史研究会 訳, 東京大学出版会
- 松田清 (1998) 『洋学の書誌的研究』 臨川書店
- 八耳俊文 (2005) 「入華プロテスタント宣教師と日本の書物・西洋の書物」『或問』 9号, 白帝社
- 山脇悌二郎 (1980) 『長崎のオランダ商館』 中公新書 579, 中央公論社
- フォーラー, M. 「フィッセル・コレクションの真実」 週刊朝日百科『世界の文学』 84号, 2001年, 朝日新聞出版

附記：本稿で扱っているメドハーストの書簡については、陳 (2022a) の附記で記したように、台湾の研究者蘇精氏によってタイピングされたものを活用させていただいた。また、ロンドン大学 SOAS に所蔵されている基となる手書きの書簡は、早稲田大学の石上阿希氏に撮影していただいた。記して再度感謝の意を表する。なお、本研究は JSPS 基盤研究 (C) (20K00635) による研究成果の一部である。